



つちのいえ お披露目展 2012
2012/2/8 - 2/12
たまご茶会+コントラバス演奏会
2012/2/12 15:00~

芸大作品展にあわせて、「つちのいえお披露目展」を開催。急ぎま階段もつくり、メンバーの作品展示も初めて併設した。最終日に茶会+演奏会。





たまご茶会は前田菜月(漆工M1)の発案。ダチョウの卵でつくった器を使う。
コントラバス奏者の赤松美幸さんは、音楽学部在学中につちのいえに来て、ここで演奏してみたいというので、卒業後のこの年、実現した。選曲も本人による。音楽学部作曲専攻の中村典子先生の新曲「つちのいのり」が初演された。



曲目：
K.Guettler 「グリーンスリーブス変奏曲」
E.Tabakov 「motivy」
中村典子 「つちのいのり」
H.Fryba 「古い様式による組曲より、プレリュード・アルマンド・ガヴォット」
ほか

丘の上を埋め尽くす来場者で、大藪家の方、大五さん、吉井工務店の方々など、学外からも多くの参加者があつた。大五さんが鍋いっぱい鹿と猪のスペアリブを差し入れて下さつた。



メンバーがアルバイトするCafeFLOOKご夫妻



2012/2/12

入りきらない来場者。小清水漸名誉教授も来て下さつた。

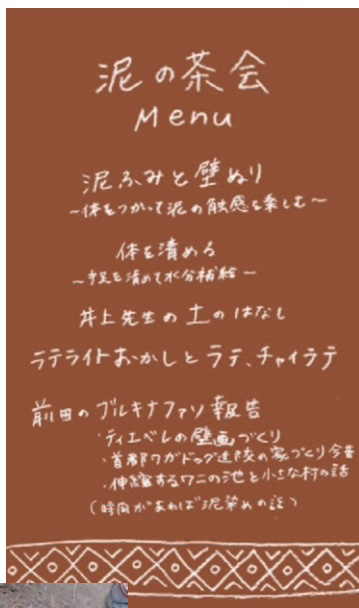


大五さん差し入れのスペアリブをほおぼるメンバー。

泥の茶会

2012/7/29

春のたまご茶会に引き続き、前田菜月（初期の「峠の茶屋」の時期から参加）が、ブルキナファソでの体験報告を兼ねて、「泥の茶会」を企画・実施した。



泥ふみと壁塗り：前日に柔らかくしておいた土をブルーシートの上に広げて裸足でこねる。そして素手で手の跡を残しながら壁に塗りつける。



並んでいるのは前田菜月のブルキナ土産



ラテライト石にそっくりなラテライトお菓子（前田手づくりのクッキー）に泥のようなペースト（きな粉に蜂蜜入り）を載せる。

ラテライト石にもペーストを載せてみる。食べ物に見えてくる。



前田の報告から：カイエおばあさんに壁画を習う

地上であそべ

前田菜月

2008～2012年 参加
2015年 京都市立芸術大学大学院漆工専攻修了
最近の活動:
2018「人工的品」ギャラリー@KCUA
2021「人工の森」アルティーホール 3/2-3/31

*その時に習った壁塗りのレシピは以下のサイトに詳しく書いています。

田中樹ほか編『フィールドで出会う風と人と土2』p.52～
「ティエベレの壁塗りのレシピ」
https://www.chikyu.ac.jp/publicity/publications/others/img/kazehitotsuchi_essay2_0320.pdf

漆工専攻の院生になった春、私は鬱屈としていた。この狭い枠の中に行儀よくいるのはつまらない。そしてお金もなく半年休学してお金を稼いでいた。

そんな時、井上先生が雨季の西アフリカのブルキナファソから帰ってきて、報告会を開いた。その中でカッセーナの家の壁画の写真を見た瞬間に、来年の乾季、家づくりの季節にブルキナファソの壁塗りを習いにいこうと決めた。

3月上旬ブルキナファソに向かった私は、英語が通じないこと、日中の気温が50℃になることなどを体感しつつ、現地ですべ援のお仕事をされている日本人の方で大変お世話になりながら、なんとかカッセーナ地方までたどり着き、カイエおばあさんに壁画を習った*。

早朝まだ涼しい時間帯からカイエおばあさんと牛糞まみれになりながら壁塗りをする時間。家を建てるのは男性の仕事で、壁塗りをするのは女性の仕事ようだった。昔は親戚の女性達で年に一度集まって、歌いながら壁塗りをしていたらしい。今は集まった人の食事を留意したりすることが金銭的になど難しいそうだ。

その後カッセーナ3日目に食中毒になり、急遽首都ワガドゥグに引き返す。自分の内臓の中で大蛇が暴れているような初めての痛みの体験。滞在中にマリでクーデターがあり、トンブクトウの遺跡を見に行くのはやめにして、ブルキナファソのボボデュラソからロロペニ遺跡へ。ラテライトの酸化鉄の塊のような石が蜂蜜とカリテバターを糊として高く積まれて高い壁となり遺跡をぐるっと囲む。細胞壁のような、なんとなく知っている懐かしい場所のような不思議な遺跡だった。この重たく硬いラテライトの石をくつつけているのが食べ物であることがうれしくて、帰国報告の泥茶会ではラテライト石のようなクッキーに蜂蜜バターをぬるお菓子を作った。土で家を建てて、牛糞と土で文様を描いて、ポットを作って、石を食べて。ブルキナファソの市場では薄ピンク色の落雁のように小石が食品として売られていた。ビタミンがあるのかな？ カッセーナで地面にトーを乾かすために広げている様子も本当によかった。

ブルキナファソでの3週間。地上での環境に応じてなんとか工夫して生きていること、生活と生存と芸術が分離されていない世界に身を置いて、分離され価値付けられる芸術(当時は工芸分野)を学んでいる身からすると、憧れと同時にすごくほっとする感覚を得られた。生活や生存のようなすごく密接した位置に、すごく広大な工芸や芸術の世界があると体感できた。分離することは文脈付けたり、価値づけるには必要な要素だが、そのせいで世界を狭めてしまっていることに自覚的でいたい。つまり、遊べるフィールド、ヒトが生存する地上はまだここにもある。

わたしにとってつちのいえは、はみだしものの遊び場のような場所。

つちのいえに来るとそこには大地と必死にあそぶ人がいる。時折訪れる先人達のような人々とも交流できる不思議な場所。それは、いつも押し込められている枠の上に登ってそこんと抜けた空間で偶然誰かに会えたり、1人でいたりする場所でした。



カッセーナの村 ブルキナファソ



ロロペニ遺跡(世界遺産) ブルキナファソ



トーの原料粉(モロコシなど)を地面に干し広げる。

窓づくり_4号壁

2012年10-12月

西側の4号壁も、ほかと異なる窓のデザインを施すことになり、アーチのある大きな窓を設けるべく、つちのいえの丘でいい曲がり具合の枝を探す。丘の上はあちこちにシラカシが大きく育っていて、材木資源の宝庫である。



窓のアーチに使えそうな枝はなかなかない。



うまく合わない。



ついにいい枝を見つける。



窓にあてがいがながら、取り付け方を検討する。



竹小舞と補強材を取り付けた状態で芸祭で公開。



補強材をあえて見えるようにして土を塗る。ほかの壁とちがって、できるだけまるやかな表情になるよう、大藪家の良質の壁土を練ってコテで上塗りする。



内側からも土を塗る。ここは二重竹木舞ではなく、通常の竹小舞だが、太い枝のアーチのせいで不厚く感じる。



窓の下にカウンターをつけることになり、壁に穴をあけて竹を打ちこむ。日干しレンガは予想以上に固い。



打ちこんだ竹にシュロ縄を巻き、土を絡ませて塗り込む。



窓とカウンターが唇のようになった。



細かい土粉でさらに表面をすべらかにする。

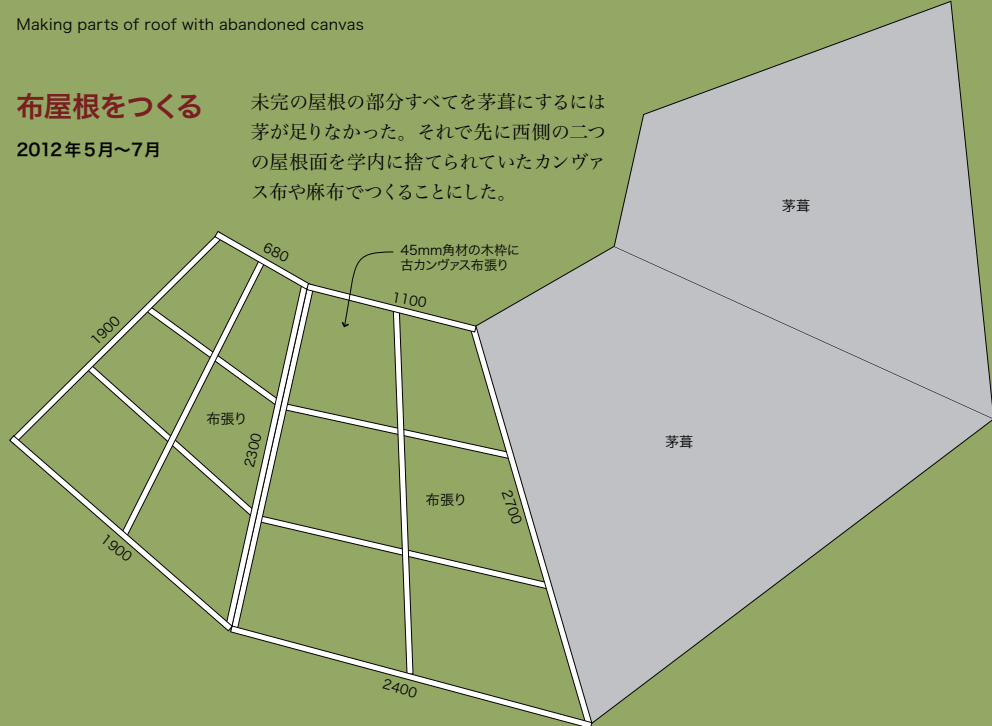


完成したカウンターでお茶。2012年12月13日

布屋根をつくる

2012年5月~7月

未完の屋根の部分すべてを茅葺にするには茅が足りなかった。それで先に西側の二つの屋根面を学内に捨てられていたカンヴァス布や麻布でつくることにした。



捨てられたカンヴァス布は探すすぐに大きなものが見つかった。漆の布着せの工程で使う麻布も捨てあったのを見つけた。大きさが十分か、2種類を屋根にあてがってみる。



屋根面の変形した四角形に合わせて45mm角材で木枠をつくる。これにカンヴァス布を張ると、昔流行ったシェイプト・カンヴァスだ。つちのいえに本格的に絵を描くことが導入されるのはこれが最初。



木枠で布をトリミングする。塗られていたアクリル絵具の色がつちのいえに合わないの、色を落としてみると、石畳のプロッターージュ効果が出た。



まだまだ強い色味を抑えるため、上から絵具を重ねる。参加者は日本画専攻が多いので、油画専攻が捨てたものを日本画専攻が再生するかたち。

屋根には、つちのいえの制作過程を14のパートに分けて描くことが決まる。図案は7名で分担。

- 1_土地開拓、版築壁づくり
- 2_竹組み、茅集め
- 3_土集め、屋根の骨組み
- 4_茅葺きの様子、壁塗り
- 5_土ブロック作り
- 6_窓作り、お菓子休憩
- 7_キャンパス屋根作り

製品化された絵具は使わない。井上がアフリカから持ち帰った土(黒、赤、白)を顔料化したものと、陶磁器棟から調達した豆炭とアルミナの粉をニカワで溶いて描く。人物は黒、土は赤、ワラや竹は白とおおまかに決める。



窓づくりの場面を描く内モンゴルからの留学生サンナ(珊瑚)。彼女はよく故郷のお菓子を手づくりして差し入れてくれた。



漆工から調達した麻布は、キャンバス布と吸湿性がちがうが、粗い顔料とニカワという組み合わせでクリアできた。



防水性をもたせるため、表面を蟻引きすることにし、染織棟に運ぶ。



染織の三橋遼先生が親切に対応下さる。作家=教員が専攻の垣根を越えてつながる京都市大ならではの恩恵をこうむる。



130度くらいで溶けた蠟(パラフィン)を熱いうちに刷毛で塗り延ばす。冷えて固化するのが早いので注意。



蠟引きの終わった布屋根の上端と左右の端に、水切りのための銅板(建材用、購入)の縁を丁寧に付ける。

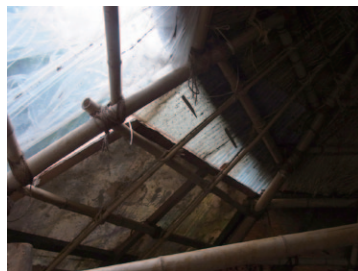


茅葺きの継ぎ目部分を下から押し上げ、布屋根を差し込んで竹の小屋組みに固定する。ハイブリッドな屋根の奇観に近づく。



*のち、夏の日中の高温で布屋根の蠟が溶けた。さらに2017年には一部に穴が空いた。布屋根は屋根に適さないことがわかった。

蠟引きされた表面は雨水をはじく。



布屋根と茅葺きの間の隙間はポリカ波板でふさいだ。